

第4講 インプットからインテイクへー書記言語による補い

次は「書き言葉 = 書記英語」の問題です。難聴の子どもはなるべく早い段階から書記英語への発展を考えておくのがいいと思います。それは、幼稚部の早い段階でカナ文字を覚えると言語指導が進めやすくなるのと同じです。

1 「聞く」「話す」「読む」「書く」の4活動をふまえて

英語学習のスタートは音声のみですが、中学校に入ると「聞く」「話す」だけではなく、「読む」「書く」が入ってきます。聞こえる子どもの中にも、この「読む」「書く」活動でつまずいてしまう子がけっこういるのです。音声英語と書記英語をバランスよく学習していくことが、英語の学習には不可欠です。英語のアルファベットは表音文字で、書記英語は音声に対応して
10 います。文字を使うことで音声英語の認識も確かなものになります。音声と文字の関係は、「片方をしっかりやればもう一方にも好影響が出てくる」という関係にあります。だから、書記英語から攻めていって、音声言語の方も改善することが可能です。私は会話のトレーニングはほとんどやらずに、もっぱら辞書を引いて論文を読む勉強だけでしたが、ALT と話すくらいは何とかできます。そんな経験からも申し上げられるかと思います。

ところで、難聴の子どもの場合には、個人内で、「この二つのバランスをどうとるか」には、聴力が関係します。中等度から、高度・重度と厳しくなるにつれ、書記英語の比重が増すのは当然です。でも、重度の子どもでも音声英語にある程度対応することは可能だし必要です。逆に、中等度くらいの子どものであっても、文字の力を借りた方が学習は進めやすいのです。経験的には、書かれた英文テキストを見ながら話を聞いて何とかなるくらいの聴能レベルの子ならば、聞く・話す活動も聞こえる子に伍して相当やれると期待できます。
20

2 小文字はつまずきの石

最初の関門は小文字です。アルファベットを書かせると「大文字しか書けない子」がいます。ところが、英文のほとんどは小文字です。このギャップを埋めることがどうしても必要です。これはもう「習うより慣れる」で、辞書を引いてスペルを読み・書く、という回数で解決していくしかありません。一人でできない時には、親・家庭教師・通級担当などの誰かが付き合っ
てやるのが大切です。

その際に、意外と有効なのがスペル読み、book ならば「ビー・オー・オー・ケイ」と読むのです。小文字が不確かな生徒にはこんなことを一月くらいしつこく続けるとかなり改善されます。その後もたまにやらせてみて、スペルに対する感覚を鈍らせないことが大切です。幸い、
30 ローマ字の読める子が増えています。これはコンピューター入力の副産物だと思うのです。

3 phonics がひらく難聴の子どもの英語学習

phonics というのは、スペルと読みの関係のルール、およびそれを意識的に教えていく教育方法を言います。系統的に教えるやり方もありますが、私はそれをしません。まずある程度の

数の「音声による語彙」を身に付けさせて(200くらい)、次にアルファベットの小文字を仕上げます。その基盤の上に立って、それらの単語を整理する段階で少しずつ教えていきます。

こういうトレーニングを続けると、初めて見た単語でも、かなり読めるようになりますし、音からスペルを類推できるようになります。understand という単語は、文字だと10、シユラブルだと3つです。だから、スペルをすっぱり最初から覚えるより、まず音でストックして、次にフォニクスのルールと関連付けてスペルを覚える方が覚えやすいのではないかと思います。聴覚を活用する方が、文字だけで語彙習得を進めるよりもはるかに効果的です。

フォニクスルールの基本を少しだけ紹介します。

- 10 子音は大体、ローマ字と同じです。l とか c とかローマ字では使わない子音もありますが、いくつもないので問題はないでしょう。

母音は難しく、ローマ字とはかなり違います。cut はクトではないですし、make はマケでもありません。これに早く気付かせることです。

二字以上がセットになるものも多いですね。st とか、oo で ウ, ea で イー, とか。さらに、エーとエイ, オーとオウは厳密には違います。これらの二重母音や長母音は、シユラブルも1つに数えます。日本語式に「エ・イ」とやっではいけないわけです。

先ほども言いましたように、phonics については系統的に教えていくやり方もあるのですが、NEWS ではその方法をとりません。phonics は、アメリカでは幼稚園段階の子どもに読みを教える方法として広く活用されています。幼児は音声での語彙はものすごく持っているけれども、それを文字シンボルと結びつけていない。その溝をフォニクスで埋めていくわけです。

- 20 日本の中学生は、外来語という形で多くの英単語を知っていますが、個人差がものすごくあり、英語の語彙の量が十分でないケースもけっこうあります。そこで、私は最初からフォニクスでやるのではなく、辞書を使った語彙習得を先行して進めさせます。200 くらいの単語を子どもが身に付けたかなあ、というあたりでフォニクスを意識して使い始めます。その際にも、系統的にやるのではなく、折に触れて生徒が自分で単語を読むような場面設定をして徐々に入れていきます。

- 30 NEWS では指導は3週間に1回ですので、効果が出るまでに時間がかかります。長岡で通級指導をしていた時には、毎週指導できたので、早い生徒は1年生の二学期末、遅くとも2年生の1学期くらいにはほとんどの生徒が教科書の本文は、見ただけで読めるようになりました。こうなれば、英語の授業にも身が入ります。この学習には、聴力レベルはあまり関係がなく、一番早く身につけた子は、実は一番聴力の厳しいお子さんでした。

